

# Trial & Error

**No.299**

January-February 2013

特集

## 変わるラオスで 変わらないラオスで

写真上：北部ルアンナムター県、水田だったところにできたバナナ園の風景 (写真提供：ADRA Japan)。

写真下：南部サワナケート県、村の森の利用状況や境界線を確認するために村人とともに実際に森を歩く。

# 変わるラオスで 変わらないラオスで



■ラオスとその周辺。こうした地図を描くときにはどうしても国境に線を引いてしまうが、人や資材、暮らしのあり方もどんどん越境していく。

東南アジアの内陸国、ラオス。「森が豊かな国」「桃源郷のようだ」というイメージがいまでも強いこの国も、ある面では変わらざるを得ない状況に置かれている。そうした側面を、現地で活動されてきた ADRA Japan の小出氏と JVC 平野の対談から切り取るとともに、JVC ラオスでのこれまでの活動の振り返りと今後の展望を示す。今後、この国において NGO にはなにが求められているのだろうか。(編集部)

ロン郡の焼き畑地を歩く。(写真提供：ADRA Japan)

## ラオスの農村がどう変わってきているか

ADRA Japan 小出一博  
JVC ラオス事業担当 平野将人

### ■中国と接するラオス北部

JVC 平野（以下平野）・ラオスという国を考える際に、「都市部は発展、農村は変わらず↓貧富の差の拡大」といった判で押ししたような表現がよく見られます。しかし、農村も実際には少しずつ変化しています。今日はその変化を間近で見た小出さんの話を聞きながら、今後のラオスや、そこでの NGO の役割を考えたいと思います。

ADRA Japan 小出氏（以下小出）「農村の変化」で真っ先に思い出すのは、西部のサンニャブリ県を見た、伐採されつくして見事に木がなくなった丘陵地と、各農家が巨大なトウモロコシのサイロを所持していたこと。「これが、森林を伐採して換金作物栽培を取り入れた社会なのか」と思いました。

社会的な側面で言えば、ラオスに赴任した当初はいわゆる浮浪者を見かけなかったのですが、昨年あたりには首都のビエンチャンで時折見かけるように

なりました。これは、都市化や換金作物の栽培と出荷に伴う農村部からの人口移動といった社会構造の変化を、結果として受け入れられていないという側面の現れとも見られます。新しいセーフティーネットが必要ですが、行政にそこまでの長期的ビジョンがあるでしょうか。

村ではまだ子だくさんの文化ですが、都市エリート層は少子化／学歴社会化が進んでおり、教育費がかかるから子どもは多くても二人、という感じ。

平野・すごいスピードで変わってますよね。九人兄弟だった人の子どもがたった二人、など。ラオスは都市と農村の格差が少なくと言われてきましたが、今は都市部はお金に貪欲になってきています。三年半の駐在でその変化は大きく感じました。小出・ADRA Japan では中国と国境を接するラオス北部のルアンナムター県で活動していました。三年の駐在期間で、活動村が「自給的世界」から「開発の波に乗る」という非常に大

きな変化を目撃しました。

駐在当初、活動地の村々では焼畑での稲作が中心で、村人は換金作物にも関心があるが何をしたいのかわからない状態でした。それが、水田の多かった村の景色が、見渡す限りのバナナ園になっていったのです。驚いたのは、それが遠く四川省などからやって来た中国人によって作られていったことでした。

中国人はまず県の都市部に中華料理店を開いて、そこを拠点にして中国人を呼び、彼らが田畑を切り開いてバナナ園にしてしまおう。「田んぼは重要なはずなのに…」と衝撃を受けましたが、一ヘクタールあたり一千万キップ（約十万円）にもなる（土地の）賃貸料は、水田で稲をつくるのと比べてそう悪くないので、村人にとって競争力はあった、ということでした。

非常に勤勉で優秀な人が多い少数民族の村でも、伝統的な暮らしをしていながら中国企業の進出を受け入れました。毎年村で話し合いをしていましたが、



■ちょうどほぼ同時期にラオスに駐在していた小出氏（写真左）と平野（同右）。

こいで かずひろ

小出 一博 (ADRA Japan プログラム・オフィサー)

大学卒業後、国際協力の技術としての農業を身につけようと志して就農、17年間有機農業を続けた。2008年6月から2012年6月までADRA Japanのスタッフとしてラオス北部ルアンナムター県ロン郡に駐在し、焼き畑地帯で定着農業を広めるための事業、少数民族食糧確保のための支援事業、住民参加による水資源活用のための事業を運営した。2012年6月にラオス事業終了とともに帰国。現在は東日本事業担当として主に農業と漁業での活動立案に関わっている。

田は漬さないようにしつつ、換金作物を少しづつ受け入れることで現金収入が大きく増えました。家はコンクリートになり、電気も通り、村人はこぞってテレビや携帯電話を買いました。バナナの収穫の際の日当、いくらだと思えますか？

平野・日雇いの農作業の相場で、一日三万から四万キップ（三〜四百円）くらいでは？

小出・一日十万、体力がある人はその二〜三倍です。これでは村が変わらないはずがない。そうして生活が変わる中で、村で不協和音が響くようになったことも事実です。村でみなでやる水路の補修を拒否する若者が出てきたりしました。「村ありき」の社会から、我々日本人がよく知る社会が変わってきた、というように感じますか。私が見てきた地域は、全国的にもかなり激動した地域ではありませんが。

### ■伐採と植林が進む南部

平野・噂には聞いていましたが、想像以上ですね。JVCの活動地である南部のサワナケート県では、「古き良きラオス」のイメージがまだ色濃いです。

小出・東西回廊が走っています

平野・東西回廊自体は、今も路

面を補修していたり、最終的に荷物を出すダナン（東西回廊の東端、ベトナムの港湾都市）までの道が山がちだったりと、経済回廊として最大限に機能するのはまだ先のようなです。さらに、タイの出資で作られた第三友好橋のルートに注目が移っていると聞かれます。中国国境に接し中国人が越境してくる北部地域とは違い、タイやベトナムからの企業進出がメインですね。

小出・そうした進出は、どうやって村に入ってくるんですか？

平野・多くは、先ほどのお話のような「村人自身が植える作物を変えるようになる」ということではなく、伐採と植林ですね。ある日突然、焼畑をしたり林産物を採っていた森が伐採されて、補償も充分でないままゴムが植えられ、企業から声をかけられれば時々そこに日雇いで行く、といった感じですね。

### ■変わらなくてよい面とは

小出・すると、従来やってきた焼畑に悪影響が出ますね。土地が制限されて移動範囲が狭くなる（プロットが少なくなる）と、除草も大変になるし連作障害も起きます。健全な焼畑ができないようになる懸念があります。

平野・それはすでに顕在化してきていますね。「焼畑の安定化」の名の下に小さな範囲で焼畑を運営するのが政府の方針でもあります。村の風景が変わるほどの規模ではまだないですが、サワナケートでも換金作物の契約栽培も広がりつつあります。

小出・それはすでに顕在化してきていますね。「焼畑の安定化」の名の下に小さな範囲で焼畑を

平野・たしかにそうですね。

平野・JVCの活動地でまさしくそれを感じます。もちろん現金経済化や農業の商業化は今以

上に進むと思えますが、よくも悪くもそこに入らないコミュニティ、人々は存在し続けるでしょう。そして、きちんと自給できる農村社会があることは、都市に出てうまくいかなかった人でも帰る場所があるというラオス社会の足腰になりえます。

平野・JVCの活動地でまさしくそれを感じます。もちろん現金経済化や農業の商業化は今以

上に進むと思えますが、よくも悪くもそこに入らないコミュニティ、人々は存在し続けるでしょう。そして、きちんと自給できる農村社会があることは、都市に出てうまくいかなかった人でも帰る場所があるというラオス社会の足腰になりえます。

小出・昨年日本の原発事故以降色々考えましたが、ラオスから見ると、日本社会の電気に対する依存は異常に思えますね。

平野・先日ラオスのすぐお隣の東北タイの農家が日本にきた際に、原発事故の避難者が数日しか親戚のところに入れない、ということを理解できなかったようです。タイやラオスなら一年でも二年でもいられるのに、十人で住むのも十一人も生活経費は一緒だし、農業をしていれば家族の仕事は沢山ある。家庭に吸収力があるんですね。行政をあてにしないで隣人同士で助け合う感覚も根強くある。

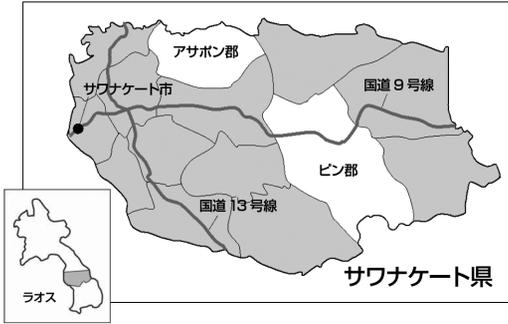
小出・価値判断は色々ですが、これまでの「統合」された日本の社会のあり方とは違ったものの、会社と核家族の他にも「隙間」や「コミュニティ」という居場所が人間には必要です。それを今も持っているラオスの社会のあり方は、暮らしていても健全に感じられました。

# サワナケートでの三年間の活動を振り返る

JVCラオス事務所現地代表 グレン・ハント

○九年初め、JVCは十五年間におよぶラオス中部のカムアン県でのプロジェクトを終えて、南部のサワナケート県において新しいプロジェクトを開始した。それまでと同様、「住民主体の森林保全活動」と「持続的な農業・農村開発活動」を二本の柱とした活動を県内のピン郡とアサボン郡の二郡を対象としてきたが、それまでのカムワン県での活動とは物理的にも政治的にもまったく異なる環境と状況に適応しなければならず、結果としてこの三年で数多くの問題に挑戦することとなった。

■サワナケート県の地図。JVCの活動地はピン郡とアサボン郡。事務所のあるサワナケート市からは車で三時間程度。国道九号線は、国際的な経済回廊である「東西回廊」の一部となっている。



## ■新しい活動地での挑戦

活動開始時から、特に「農業・農村開発活動」において多くの問題に直面することとなった。これは、サワナケート県における地理的・物理的環境が影響したといえる。例えば、カムアン県では、村人による長期的な管理が可能な浅井戸の掘削支援を行なっていたが、サワナケート県では地下に岩盤があることが

ら多くの村で浅井戸を掘ることができず、深井戸を掘削することになった。しかしこれは、村人自身による井戸の管理という点では、補修のしづらさなどから持続性の面で難しい活動となった。

また、カムアン県と比べ、サワナケート県アサボン郡の田は土壌の質が劣り、一ヘクタールあたりの収量が非常に低いことが、多数の農民によっても言及されている。さらにピン郡では、多くの農民が移動式耕作（いわゆる「焼畑耕作」）をしている。

もう一方の「森林保全活動」においても、新しい挑戦が見られた。湿った硬葉植物が豊富に自生するカムアン県と比べて、乾燥フタバガキの多いサワナケート県の森林は、大規模な林冠（森林の上層部のこと）を持たず小規模で木々の種類も少ない。空間も開けていて、動物の牧草と飼料となる下生えが多く存在する。こうした森は、保護の対象と見なされにくい。また、広大な森林地域や村人

が使用している高地農業地域において、村間の衝突と不信を引き起こす伐採に伴うゴム植林の問題にも直面した。

さらに、活動期間当初に土地と森林に関する急激な政治環境の変化が見られ、大規模な土地収用問題の認識がラオス全土に広がる中で（企業が土地をリースして実施する植林事業などは、場所の選定、取得の経緯などに大きな問題を孕んでいた）、新しい「土地森林法」が制定された。これにより、それまでの森林保全活動の要であった「土地森林委譲（LFA: Land and Forest Allocation）」にも大きな変更が生じた。

中でも、最も重要で大きな挑戦は、少数民族コミュニティの存在であったといえる。活動対象村である十五村のうち、十一村が少数民族の村であった。これらの村では多くの村人（特に女性）はラオス語を話さず、理解できないという環境にある。ラオスでは、人口の三十三%が少数民族であると推定されているものの、以前の力

ムアン県の活動対象地域には、これほど多くの少数民族の人は暮らしてはいなかった。

## ■問題をチャンスに変えて

様々な問題に直面する中で、しかしJVCはそれらをチャンスととらえた面もある。

サワナケート県に暮らす少数民族はモン・クメール語族の一派であるブルー族が主である。そのため、ブルー語を話すスタップを採用し、少数民族を対象にしたインターナショナル・プログラムも開始した。こうした取り組みは、JVCと活動対象村との信頼関係の構築に貢献したとともに、活動への理解促進にもつながった。そして「森林保全活動」のなかで、サワナケート市の少数民族学校に通うブルー語話者の学生による演劇や人形劇を通して森林管理への理解促進を図った。彼らと同じ民族の村なので、土地や森林に関するコミュニティの権利について村人と楽しく学び理解するという自立的な活動ができた。

土地収容問題は、急速な経済開発を推進する政策をとるラオスの国全土で起きている問題である。活動対象の二郡、特にピン郡で難しい問題として現れてきていた(活動開始前にすでに企業による不適切な土地取得が起きており、かつ郡行政はこれを推進予定だった)。そこで、「森林保全活動」

において、ラオス国立大学や中央政府機関など、異なる開発パートナーとの協働を通して、①村人に自然資源と土地の重要性について認知してもらい、②森林と土地に関する法的権利について教え、③魚保護区やコミュニティの共有林等における自然資源管理システムを確立し、④LFAに変わって新たに制定された土地森林利用プログラムである「参加型土地利用計画(D-LUD・Participatory Land Use Planning)」の改善を政府に対して働きかける、といった様々な活動を展開してきた。

その他にも、「森林保全活動」の一環として、GIS(地理情報システム)等を用いて村の地上状況を調査しケーススタディーと研究を進め、土地森林法の施行と政策改革を推進する政府の政策に対して提言もしてきた。サワナケート県に自生する乾燥フタバガキ林を活用した様々な自

然資源に関する調査も実施しており、これはラオス国内において先進的なものである。

一方の「農業・農村開発活動」においては、痩せた土地の問題に向き合うため、様々な有機肥料づくりを通して土壌改善を進めてきた。そしてこれは、JVCラオスの農業分野における幹である稲作のSRI(幼苗一本植え)を通しての収量向上を手助けする要素ともなった。

サワナケート県における三年間の活動を通して、これまでに約六十の農家がそれぞれの土地に合わせたSRI技術を実践してきた。また、東北タイのタイ人農家とのネットワークを活用して農業技術研修を行なったり、政府によるハイブリッド種子の大規模な促進によって失われた伝統的な高地及び低地の種を共有する活動も実施してきた。米は村人によって生産される最も重要な作物であり、また多くの村で共通して不足となる食糧でもある。そこで、不足する時期に外から高い価格で米を買わなくてもすむように、米銀行と呼ばれる、村人が低い利子で村から米を借りられるローン制度を八村で導入した。SRI、米銀行ともに農民同士の交流を重視し、モデル的農家や村

が生まれている。

サワナケートでの井戸掘削については、非常に挑戦的なものであった。前述の通り、多くの村で掘削業者に頼んでドリルで深井戸を掘るが必要があった。JVCの支援以前に掘削されたが故障したまま放置されている深井戸も散見された。そこで、JVCでは、壊れやすいが修理資材が入手しやすい小さな簡易型井戸と、修理は難しいが汲み上げる力の強い大型井戸の二種類を、村ごとの状況に応じて設置することにした。掘削場所は村での話し合いを通じて決め、井戸修理ボランティアの育成と修理資金を管理する委員会の形成を支援し、深井戸の長期的維持管理を目指した。

これまで述べてきた主要な活動に加えて、ラオスの人びとの多様な暮らしぶりを鑑み、家畜飼育や養魚などいくつかの新しい可能性も試みた。研修を行ない、資材を支援して、村人が所有する池を使って魚養殖を試みたり、村内で家畜の貸し出す家畜銀行も実施した。

## ■期待と挑戦の

### 「第二フェーズ」へ

JVCは、これまでの三年間のプロジェクトを「第一フェー

ズ」と位置づけている。ここでの経験をもとに、現在はこれまでと同じ二郡において活動対象村を拡大しての「第二フェーズ」を準備しており、その準備の最終段階(ラオス政府との契約書(MOU)の締結待ち)にある。

ラオスの地方に住む子供二人のうち一人が深刻な栄養不良による発育障害に苦しんでいるというWFPの報告もあり、JVCの活動地であるサワナケートもその例外ではない。国民の栄養確保は、ラオス政府が取り組むべき優先課題として設定されている。

第二フェーズにおける活動紹介は次頁にゆずるが、「農業・農村開発活動」はもとより、「森林保全活動」もラオスの村人にとって生活のセーフティネットである森林と農業活動に必要な土地を確保するためのものもあって、その両者をもって、JVCは「村人の安定した食料確保」を実現するための活動としている。まだまだ残された活動と挑戦は多い。対象村における生計改善に貢献し、貧困の原因となるような政策に対して提言していく足場として、サワナケートという場所は、JVCが今後も活動し挑戦していく場所であると考える。



■ PLUPでは、衛星写真を使って村周辺の自然資源分布を村人と話す。



■青空の下でのSRI田植え。



■力を合せての浅井戸作り。

# 時間をかけて向き合うこれからの三年間

JVCラオス事務所現地調整員 林真理子

## 引き続き同じ活動地で

○九年一月から一二年一月までの「第一フェーズ」が終わり、正式な「第二フェーズ」の開始に向けて、JVCは第一フェーズのフォローアップを行ないつつ、第二フェーズの準備をしてきた。NGOがラオスで活動する際には、ラオス政府との契約(MOU・Memorandum of Understanding)を取り交わさねばならず、この契約期間が三年。これがフェーズの区切りとなる。私は、今年八月末から前任者である平野将人に代わりサワナケート事務所に着任した。

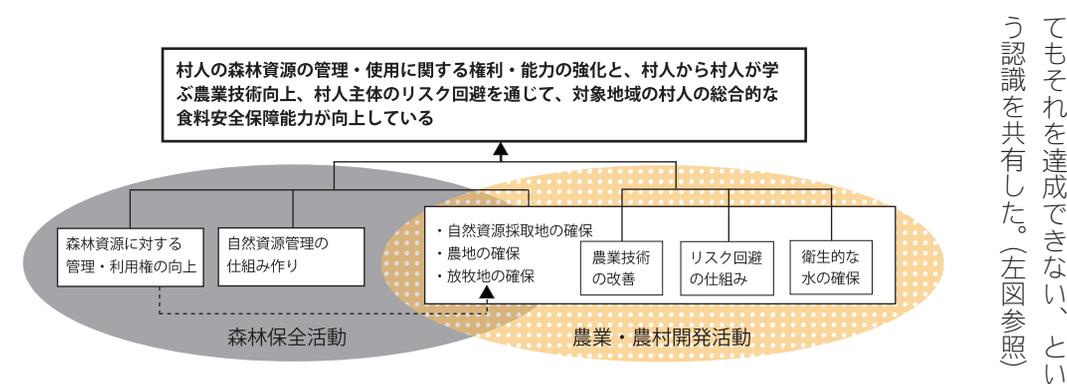
第二フェーズでは、第一フェーズの活動と同様、「住民主体の森林保全活動」と「持続的な農業・農村開発活動」を行なう。活動内容も第一フェーズの活動を継続させ、進化拡大するものも少なくない。活動対象地も第一フェーズ同様アサボン郡およびピン郡の二郡となる(ただし、活動対象村は既存十五村に新規十五村の三十村へと拡大する)。「数年活動してきたのに、なぜまだ同じ地域で同様の支援が必要なのか」と思う人もいるかもしれない。以前の仕事でODA事業をかけた経験のある私も、内心では「NGOの活動対象は狭くて深い。もっと広く波及するような形で活動できないか」と思っていた。一度、その疑問を平野にぶつけたことがある。その時は「JVCの活動地が少ないとは思わない。持続可能で、意味のある活動をしようと思ったら相当な時間がかかる」と言われた。そしてこちらへ来て三カ月。何をすることも問題にぶちあたり、なかなか前に進まない。なるほど、現地の人と向き合い、意味のある活動をしていくにはやはり時間がかかるものだ。

JVCラオスの活動においては、村人の生活のセーフティネットである森林を守り、同時に農業活動に必要な土地を確保する「森林保全活動」と、食料確保のための主体的な取り組みを実現する「農業・農村開発活動」を二本の柱として、村人の安定した食料確保を実現するのが、第一フェーズから一貫した本プロジェクトの目指すところである。

その第二フェーズでは、第一フェーズの成果を更に進化・深化させ、第一フェーズの教訓に基づいた修正を行ないながら活動を進めていく。以下、重点が主要なものを詳述しながら、それら進化・深化あるいは修正のポイントを見ていく。

## ■第二フェーズでの修正点

①「食料確保」を軸とした森林活動と農業活動の概念的統合



食料確保のためにもに必要な活動であり、そのどちらが欠けてもそれを達成できない、という認識を共有した。(左図参照)

# 「土地・森林保全と持続的農業による生活改善プロジェクト」

住民主体の森林保全活動	
活動内容	期待される成果
知識を得る手段としての PLUP	対象地域の村人と政府の土地・森林問題の状況とその重要性に関する理解が PLUP の実施を通じて高まる
コミュニティーの若者による森林権利演劇団	
土地・森林に関する法律 / 政策についてのライツベースの研修	対象地域の村人が彼らの土地、森林、自然資源を守るのに役に立つ法律に関する知識を増す
コミュニティーベースの自然資源管理	対象地域において、PLUP の枠外でコミュニティー主体の小規模自然資源管理の取り組みが行われ、それらが法的に認識される
NTFP (非木材林産物) 加工	
持続的な農業・農村開発活動	
活動内容	期待される成果
SRI : モデル農家を核にした村人発信の技術の拡大と総括	対象地域において、既存モデル農家を核として、村人発信の技術を中心により広範に農業技術が普及する
ラタン植栽 : 実践経験者を核にした拡大	
種使用状況調査、村人同士の種交換会	対象地域において、在来種を中心に地域に合った米品種が村人によって見出される
米銀行 : 第 1 フェーズの実施	対象地域において、凶作時米確保を可能にする米銀行が、既存村の経験に学ぶ形でさらに設置される
家畜銀行 : 調査と開始	対象地域において、村人の不測のリスクの緩和を可能にする家畜銀行が設置される
深井戸、(浅井戸) : 村人から村人への技術移転とより確実な持続性確保の追求	対象地域において、持続的に衛生的な飲料水を確保する体制がある

■上位目標: 対象地域の村人が、地域の森林を中心とした自然資源の持続的な利用と地域の現状に即した農業・グループ活動を軸に食料を確保し、安定的な生活を営める。

■プロジェクト目標: 村人の森林資源の管理・使用に関する権利・能力の強化と、村人から村人が学ぶ農業技術向上、村人主体のリスク回避を通じて、対象地域の村人の総合的な食料安全保障能力が向上している。

(アドボカシー目標: 政府や他のステークホルダーが、土地コンセッションを前提とした産業植林に関連した問題についての意識を高め、農村部でのより強固な土地保有安全保障創出への動きが見られる)

■活動期間: 第二フェーズ= 2012 年 10 月 1 日～ 2015 年 9 月 31 日 (3 年間・予定)

■活動地域、活動対象: サワナケート県アサボン郡およびピン郡 (4 ページ地図参照)

■関連団体:  
 ラオス政府: 農林省農林業普及局、ラオス国立大学森林学部  
 ラオス国内 NGO: NORMAI  
 国際 NGO: CIDSE、GAPE、VFI  
 ネットワーク組織: LIWG、South Laos Network

## ②裨益者の公平性の向上

第一フェーズでは、特に農業・農村開発活動において、養魚池を所有することが前提となる養魚活動など、裨益者の公平性の確保について改善の余地が見られた。第二フェーズでは、それらの活動の取捨選択を行ない、より多くの村人が参加でき、最貧困層への配慮がなされる活動となるよう注力し、裨益者の拡大を実現することで公平性を向上させる。

その他、第一フェーズで深まった各郡および各村の地理的実情の理解を基に、その土地に合った活動を選択し、また行政区分にこだわらずに集落単位での活動実施、在来技術の掘り起こしなどについても、活動あるいは活動実施アプローチにおいて修正を図る予定である。

## ■第二フェーズでの進化・深化点

### ①モデル農家・モデル村を核とした、活動の拡大と深化

第一フェーズでは、モデル農家と呼べる村人や、米銀行などの村ぐるみの活動を成功させているモデル村と呼べる村が生まれた。第二フェーズでは、これらの村人、村をリソースとして活用し、村人から村人への学びをより促進することで、村人主体の活動の拡大と深化を図る。

②ブルー族の対象地への取り組みの更なる強化  
 対象村の多くはブルー族の村であることから、第一フェーズでは数人のブルー族スタッフを雇用した。意識啓発の人形劇をブルー語で実施、米銀行の実施村でもブルー族村どうしの情報共有を図るなど、ブルー族への対応を意識しながら活動を実施してきた。新しい活動の受け入れには比較的慎重な傾向の見えるブルー族の村だが、今後モ

## ■時間をかけて向き合う

しかし、これまで述べてきたような活動によって一定の成果があったとしても、村の最貧困層まで支援が行き渡らなかつた。また PLUP によって村の境界線を明確にすることで逆に村の衝突のきっかけを作ってしまうこともあるかもしれない。そうした問題に対しても、外部者の NGO として、時間をかけてとことん向き合いながら活動をしていくことが、現地の人にとって必要な支援をする上で不可欠である。これからも引き続き、ラオスでの活動にご理解とご協力をお願いします。

## タイ若手農民が来日。

11月11日、タイから若手農民2名が来日しました。09年から始まった日タイ若手農民交流の一環で、今回はタイの若手農民が日本の新規就農者を取り巻く社会状況や経営方法について学ぶこと、またタイでも計画されている原発建設に対して福島県の経験を学ぶことを目的に約2週間日本に滞在しました。農業と原発を分けて、2人からの報告をお届けします。

もうひとつは、グループで活動する人たちが多かったことです。彼らは農作業をする時間以外に、グループの活動として消費者と交流できるイベントを企画し、消費者と積極的に関係を持つように時間を作っていました。生産者自らが、消費者に対して生産の過程を知ってもらう機会を作っていたことは、お互いを知ることにもなるし、野菜やお米に対する安心感を与えることにもなります。これはとても良いアイデアだと感じました。私の住んでいる地域ではまだグループで有機農業の活動をするとところまで至っていません。今回学んだこうした取り組みを自分の地域でもやっていきたいと思っています。

今回初めて、日本に来て、福島県の現状を見せていただきました。日本に帰るの準備が足りていない状況にもかかわらず、将来のエネルギー不足を心配して、先走って原発を造ろうとしています。また、福島で「分断」ということが言われていましたが、タイでもすでに同様のことが起きています。まだ候補地を検討している段階なのに、地域の中では推進派と反対派に分かれてしまっています。こうしたことから考えても、既存の発電方法の改善や自然エネルギーの開発をいかに進められるかについてタイでも考えていくべきだと思いました。

企業を辞めて農業に就いた人から「生きていく上で安心を得られるのは、会社で給料をもらうことよりも自分で食料をつくり出すことだ」と聞き、若い人がそういう考えを持っていることにとても感銘を受けました。

外に、グループの活動として消費者と交流できるイベントを企画し、消費者と積極的に関係を持つように時間を作っていました。生産者自らが、消費者に対して生産の過程を知ってもらう機会を作っていたことは、お互いを知ることにもなるし、野菜やお米に対する安心感を与えることにもなります。これはとても良いアイデアだと感じました。私の住んでいる地域ではまだグループで有機農業の活動をするとところまで至っていません。今回学んだこうした取り組みを自分の地域でもやっていきたいと思っています。



チャナイ・ナロムさん  
(三十六歳・ヤソトーン県)

新規就農した日本の人たちに会って、農業を始めた



カンパン・スプロムさん  
(三十七歳・チャチェンサオ県)

今回初めて、日本に来て、福島県の現状を見せていただきました。日本に帰るの準備が足りていない状況にもかかわらず、将来のエネルギー不足を心配して、先走って原発を造ろうとしています。また、福島で「分断」ということが言われていましたが、タイでもすでに同様のことが起きています。まだ候補地を検討している段階なのに、地域の中では推進派と反対派に分かれてしまっています。こうしたことから考えても、既存の発電方法の改善や自然エネルギーの開発をいかに進められるかについてタイでも考えていくべきだと思いました。

## インターンシップが開始。

98年から始まった「タイの農村で学ぶインターンシッププログラム」は、今年、第13期生3名を迎えて9月25日に開始しました。国際協力や環境保全、NGOに関心がある人をタイの農村に派遣して国際協力に関わる上での視点を養うプログラムです。約6ヵ月間、タイの農村で村人たちの視点に立って、農業、食、国際協力について学びを深めていきます。

高畑 琴音  
大学を卒業してから一年半、飲食店で接客、販売の仕事をした後、このインターンに参加しました。大学では食品の栄養について学び、就職してからはより食の根本である農業に関心を持つようになりました。また、環境も文化も違う異国の地で食に向き合いたいと思い、現在に至っています。タイに来て自分の食すものを自分で育て収穫するという生活の中で、自然との共存を肌で感じながら生活しています。

小川 友理  
昨年タイに旅行に行ったときに見たのは首都バンコクを中心にきらびやかで表面的な姿ばかり。単なる観光旅行では見えな部分も知りたいと思うようになりました。現在大学四年生ですが、いくら授業で言語や食や環境のことを学んでも机上の受け身の授業ではその先にながっていないように感じ、このプログラムに参加することに。自分の目で見たものや経験を通して異文化や環境への考えを深めたいと考えています。

根本 沙綾  
小学生の時にインドネシアへの家族旅行で自分と同年齢の子どもがお土産売りとして働くのを見て驚き、もっと世界を知りたいと大学で国際問題の授業を受講しています。福島県で農業をしている祖母からは、原発事故以降は風評被害で売れ行きが落ちたと聞きました。日本では農業の衰退や後継者が問題になっていますが、今後、日本と同じ道を辿るであろうタイで若者が農業にどのように向き合っているのか知りたいです。



■左から、根本、小川、高畑。現地での日々の活動の様子をJVCウェブサイトで見ることができます。

# 日中の距離を近づける「ともだち名人」

～『南北コリアと日本のともだち展』 中国訪問～

『南北コリアと日本のともだち展』 実行委員／地球の木 理事長

まるたに しづこ  
丸谷 士都子



■ロシアと朝鮮がのぞめる展望台の下で。ロシアの地の向こうには日本海が見える。

三年前から、『南北コリアと日本のともだち展』に中国からのカラフルな絵が加わった。中国の東北部・吉林省の延辺朝鮮族自治州にある、延吉市少年児童図書館から届く絵である。韓国の協力団体「オリニオツケドナム」が以前から交流してきた同図書館とは、ソウルで開かれた『東アジアこども平和ワークショップ』で初めて出会った。そこで絵画展への出品を依頼してやり取りがスタート、今年二月の東京展には図書館長とスタッフが来日した。

日中国交正常化四十周年という節目の年というのに、尖閣諸島の国有化宣言で日中関係は揺れに揺れている。文化交流さえも次々と中止されるなか、十月十四日から十七日に同図書館を訪れた。

延吉市は人口の約半数が朝鮮半島にルーツを持つ朝鮮族。



■延吉市少年児童図書館。入口の柱にも漢字とハングルの表記がされている。

町中の標示・看板にも、ハングルと漢字が併記されている。今年延辺朝鮮族自治州ができて六十周年。新しい民族調の公共施設が次々と建設されており、そのうちのひとつ、オープンしたばかりの博物館を訪れた。朝鮮族の歴史が写真と共に展示されている。朝鮮半島から生活の苦しかった人たちが移住してきたのは、清朝末期のころ。荒地を耕して水田作りに成功。今では中国一のおいしい米の産地となっている。日本による韓国併合後は抗日運動に携わる人が移り住み、運動の拠点ともなった。また、満州の開拓のため移住を強制された人々がいた。日本との関係が深い地域である。

しかし今回出会った人たちに限って言えば、日本を敵対視する様子はなかった。日本に抗議する標語を書いた赤い横断幕がいくつも張られた通りはあったが、ひっそりとしており日常生活が営まれていた。中・露・朝国境にあたる防川に行ったときに、黒竜江省から来た観光客に「中国に来るのに重圧を感じなかったかね?」と聞かれた。「あれは官僚がやっていること。日本人だって中国人だっていい人もいりゃ、悪い人もいるよわ!」私たちが答える前に、単純明快な答えがその奥さんから返ってきた。

◎

日曜の午後、三十人ほどの児童が図書館に集まってきた。子どもたちに描いてもらったのは、友達をたくさん作るための特別な力を持つキャラクター。かわいいうさぎや羽をつけたキャラが次々に生まれた。「楽しいお話がいっぱい詰まったふるしきを持って、あちこちにまいて友達を作ります」「友達のために怪獣をやっつけます」「K・POPの大好きな私。悲しい子がいたら音楽で元気にしてあげる」と子どもならではの発想が楽しい。

図書館の公式行事としての開催が難しかったのは、北朝鮮の場合とも似ている。しかし、図書館のスタッフと直接やりと

りできるので、反応はじかに伝わってくる。スタッフも子どもたちを引率してきた学校の先生も、「次は何をしましょう」と、積極的に協力してくれ、子どもも大人も日本にたいへん関心を持っていることが感じられる。「日中関係が難しい時だから、できないかと思った」との言葉に、「子どもたちのための行事だから」と答えてくれたスタッフの厚意が嬉しかった。

帰国後、図書館スタッフの李玉花さんがメールをくれた。「延吉の子どもたちは、『ともだち展』を通して日本という国と日本の心をとても身近に思えるようになりたい。日本の子どもたちが学校や家でのようにならごすのか関心を持つようになり、ました。図書館に来るたびに、『ともだち展』のこれからのスケジュールについて聞いてくるそうだ。

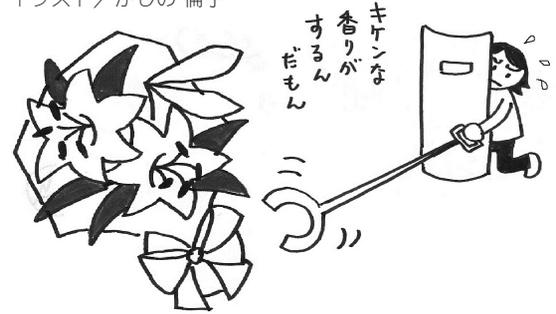
中国と朝鮮というふたつの文化を持った延吉の人たちは、より広い世界に羽ばたける大きな可能性と強さを持っているように感じた。日本ともつながりが深い延吉の人たちとの交流を続けることで、中国・朝鮮・日本の平和を考えるきっかけとしていきたい。

## スタッフのひとりごと

イラスト/かじの 倫子

### 見知らぬ花束

アフガニスタン事業担当 加藤 真希



先日、外出中に携帯電話が鳴って、出ると宅配の人からだった。「お花が届いているのですがご在宅ですか？」と言われ、一瞬きょとんとした。花なんて、誰かにもらう筋合いがあったかしら？ 誕生日でもないのに？ 送り主を尋ねると、聞き慣れない会社名の「なんとかグリーン」さんで、住所が神奈川県だった。ますます訳がわからない。とりあえず不在票を置いてもらうことにして電話を切った。花というのを聞き間違えたかも？ 誰かと間違えてるんじゃないのかな？ …考えても考えても、全然思い当たる節がない。

帰宅して不在票を確認すると、やはり「なんとかグリーン」さんから「私」宛に「花」のお届けがあることになっていた。再配達までの間も、頭からハテナが拭えない。

そしてとうとうその届け物を受け取ったら、それは見事なユリの花束だった！ ふわっと広がる豊かな香りと品格のある白と薄ピンクの大振りな花びら。美しい！ …でも、怪しい。この物騒な世の中、悪質な嫌がらせなのかと深読みして恐る恐る手に取ってみる。何か仕掛けられているのか？ とすら疑う。キレイな花束を、眉をひそめ、できるだけ体

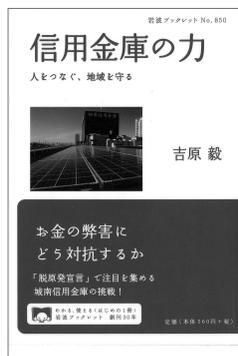
から離して見ている自分の様子は、ちょっと滑稽だったと思う。

ふと、花の間から小さなカードがぽとぽと落ちた。見ると、短いメッセージと差出人の名前が。実はこれ、私が高校時代に留学していたときの、元ホストファミリーのパパからだった。ニュージーランドにいる彼が、JVCに就職して新しい生活を始めた私にお祝いの花を贈ろうと思い立ったらしく、日本の業者に注文したのだった。なんだ、よかった～。疑ってごめんね。こうして疑いの晴れたユリは、その日から私の部屋を華やかに彩ってくれた。

## 『信用金庫の力 人をつなぐ、地域を守る』

吉原毅著 / 岩波ブックレット / 588円 (税込)

### みるよむきく



「企業の大事な役割は真つ当な商売をすることだ。真つ当に仕事をすればそれだけで社会の役に立っている。わざわざらしい社会貢献のCSRなんてやる必要なんてないでしょ」

そんなことをJVCの先輩が話していた。おそらく今の時代、「企業は利益追求」を目的としていることに疑問を持つ人は少ないだろう。企業が「公益」や「社会のため」と聞こえのいいことを言っても「結局は会社のPR。利益のためなんですよ」と勘ぐりを入れてしまうのが現代人のどうしようもない宿痾だ。

しかし、どうもこの吉原毅という人は違うようだ。吉原は東京を拠点とする城南信用金庫の理事長。二〇一〇年に現職に就き共同組織としての信用金庫への原点回帰の方針を打ち出し、理事長収入を抑えたり、任期を設定するなど異色の改革を行った。テレビ朝日系の「報道ステーション」で財界人の立場

から経済的な面で「原発は今すぐゼロにすべし」と発言をしたことで注目を集めた。

本書では、銀行と協同組合組織である信用金庫との違いを歴史を追って解説。信用金庫は共同組織運動における金融部門であり、公益を目的として発足したものであると強調している。サブプライムローン危機を招いたカジノ資本主義の誕生の経緯と、その危険性を明解に指摘している。経済史にも触れ、ドラッカーやアダム・スミスを独自の視点で紹介している。

本書の中で、吉原は第三代理事長小原謙五郎の言葉として「お金は人を惑わす『麻薬』である」という言葉を度々使用している。それに惑わされると、利己的になり、自分の子孫のことも考えない社会ができるとし、原発とその周辺の原子カムラをその最たる物として糾弾している。

この言葉が説得力を持つのは、彼が実際に行動をしているからだだろう。吉原は浜岡原発廃炉訴訟の原告となり、自社の方針として脱原発を宣言した。しかし、吉原はそれも信用金庫の当然な役目だという。「お金儲けのための経済学」を否定した経済書、おすすりである。

(震災支援担当 白川 徹)

JVCは、現在9の国/地域と東日本大震災被災地で活動しています。

## 南アフリカ



### ■ HIV/エイズ(リンボポ州)

9月下旬、パートナー団体のボランティア58名を対象にエイズ治療研修を実施した。とくにHIV/エイズ陽性者を日々支える訪問介護ボランティアにとって、年々変化するエイズ治療に関する正しい知識を得る機会は、意義深いものとなった。

エイズ治療研修を専門とする現地NGOによって各5日間の日程で実施され、ARV(エイズ治療薬)の種類とその副作用、ARVを服用する子どもへの対応、母子感染予防治療など、さまざまな内容を取り上げた。研修後には、「情報が多く、忘れてしまわないか不安…」という声から、月例会合で振り返りの機会をもつことが提案され、ボランティア自らの企画で10月から定期的実施されている。JVCはその準備をサポートしている。

10月末には、活動地域での家庭菜園に関する事前調査が終了し、データの集計、今後の菜園研修の計画作りを開始した。(富田)

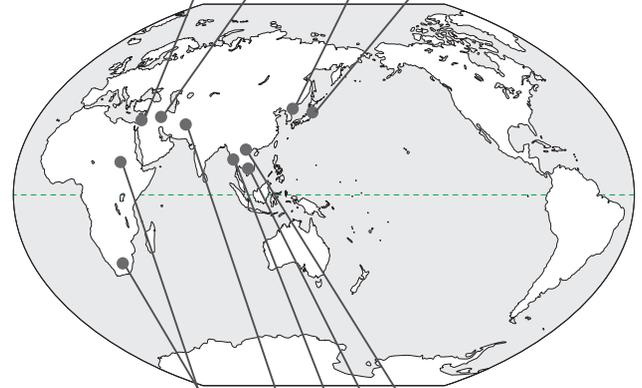
■研修にて。細胞を再現して、HIVウィルスの侵入の仕方を学ぶ。

## イラク

## コリア

## パレスチナ

## 東日本大震災



## スーダン

## ラオス

## 南アフリカ

## カンボジア

## アフガニスタン

## タイ

## タイ



### ■ 農村派遣研修

第13期生3名を迎え、タイの農村で学ボインターンシッププログラムを9月25日に開始した。東京・千葉県での研修の後、タイ渡航後の約4週間の農作業実習とタイ語研修を経て、11月初旬に東北タイをはじめ農村での暮らしを始めた。

### ■ 日・タイ若手農民交流

11月11日からタイの若手農民2名が来日した。約2週間の研修で、日本の新規就農者が置かれている状況や販売の方法を学んだり、福島県南相馬のJVCの活動地を訪問して原発の影響に関して理解を深めるなど、各地を視察した(本誌8ページ参照)。

### ■ ビルマ/ミャンマー国内状況の調査

9月17日から1週間、ビルマ/ミャンマー国内での活動の可能性を探るために、国内視察を行なった。約10団体の現地NGOを訪問し、現地情勢や海外のNGOが新規に活動を開始する際の条件・制約など聞き取りを進めた。(下田)

■千葉県の新規就農者を訪問し販売方法を学ぶタイの若手農家(右2人)。

## ラオス



### ■ 森林保全/農業・生活改善事業(サワナケート県)

村人たちは10月から11月にかけて雨季

の稲刈りに忙しい。JVC対象村でもSRI(幼苗一本植)実施農家において収量調査を行なった。その後、SRIの実施農家が互いの経験を交流するスタディーツアーを開催し、参加した農家たちは次期のSRI実施に意欲を示していた。また、ラタン(籐)栽培支援ではラタンの発芽時期であったため、発芽状況及び苗の管理状況を調査した。一部の農家では稲刈りに忙しく、ラタンの苗管理がきちんとなされていなかったが、ほとんどの農家では順調な経過が見られた。

森林関連活動については、9月から11月にかけて2013年度のカレンダー作りに参加した。カレンダーは森林管理や村人の土地および森林に関する権利について漫画調の理解しやすい絵で説明しており、後に村人に配布される。JVCを含むいくつかの森林関連NGOが度々会議を開き、カレンダーの中身について相談した。

その他、ラオス国立大学法学部の学生とともにピン郡8村、アサボン郡6村で法律研修を行なった。村人の抱える問題を聞き、法律について伝える場である一方、学生が村の問題や状況を学ぶ機会にもなった。(林)

■ラオス国立大学法学部学生と対象村で法律研修を実施。

## 東日本 大震災

### ■鹿折地区での復興支援 (宮城県気仙沼市)

気仙沼市鹿折地区で復興支援活動を実施している。仮設住宅での住民間交流を促すため、他の支援団体と共に、連続企画「趣味のじかん」を開催。

第6回目はペタンクを実施し、入居者がスポーツを通じて交流する機会を提供した。防災集団移転事業では外部のアドバイザーを現地に派遣し、住民相談会を開催。造成計画に関する要望の取りまとめを行なった。また、仮設住宅の住環境改善のため、昨年に引き続き断熱対策を実施。今後は結露対策の勉強会を開催していく。11月上旬には東京にて現地統括の山崎が「震災復興支援活動における連携」をテーマに報告会を開催。さらに気仙沼 NPO / NGO 連絡会(仮設住宅分科会)として、今後の全市的な見守り体制について市長・副市長らと意見交換を行なった。(石原)

### ■災害 FM と仮設住宅サロンの運営支援(福島県南相馬市)

仮設住宅のサロンでは住民による自主的な活動が増えている。住民の中に一人得意な人がいると、その人を先生にして「〇〇教室」が始まる。フェルトの編み物、折り紙、人形づくりなど。また、カラオケ大会や将棋教室など外部の人が協力して行なわれるイベントも盛んだ。

南相馬ひばりエフエムでは、今後放送の母体となっていく NPO 法人設立の準備が進んでいる。また、ひばりエフエムのウェブサイトがリニューアルされた。(白川)



■「趣味のじかん」でペタンクを楽しむ仮設住宅の住民(気仙沼)。

## カンボジア

### ■生態系に配慮した農業 による生計改善(CLEAN)

07年からシェムリアップ県東部で活動を実施。SRIのフォローアップとして村長や農家から聞き取りをしたところ、収穫が増えた・雑草が抜きやすい・使用する種籾が減ったなどSRIの特徴を聞くことができた。昨年のような洪水には至っていないが、一部地域では連日の雨により田んぼの一面が浸水した農家もいる。試験農場は野菜栽培用に炭・わら・牛糞などを混ぜ土作りを行なった。

### ■環境教育(EE)

09年4月からシェムリアップ県東部の小学校で実施している。日本から訪問者を迎え、生徒たちが環境に関する寸劇を披露したり、約400人の生徒と住民が集まり、1100本の苗木を川沿いに植えた。11月後半に予定している植樹祭の場所について住民や委員会メンバーで話し合った。

### ■資料・情報センター(TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を94年から提供中。9～10月は新規の学生利用者が21名、貸出冊数は297冊。11月後半から開催する連続講座を準備中。

### ■技術学校

85年からプノンペンで職業訓練校と付設整備工場を運営、2000年以降はJVCから独立して自立運営中。月間車両修理受注台数も約140台にまで増加、ボートの溶接関係業務も増えており、今後もサービス強化に取り組む。(若杉)



■穴を掘るのは大変だが楽しそうに植樹する生徒たち。

## イラク

### ■地域社会支援

6月～7月に実施した「子ども平和ワークショップ」の実施後評価を実施。家族や近隣の人々への聞き取りから、参加した子どもが対立より譲り合いを好む考えを他の子どもに伝えるなど好ましい結果が見られ、親子子どもの教育環境の改善を当局に陳情するなどの副次的な効果も見られた。

### ■「イラク戦争10年」キャンペーン実行委員会の立ち上げ

「イラク戦争の検証を求めるネットワーク」として、他の市民団体と協力して、2013年3月のイラク戦争10年のタイミングでのシンポジウム開催を中心とするキャンペーンの実行委員会を9月末に立ち上げた。

### ■イラク事業全体(2009年～2011年度)の事業評価

当初は地域委員会の取り組みを知ろうとしたが、見込みほどには動いていないことがわかった後の軌道修正が十分でなく、ワークショップに注力し続けたことが反省点。(原)



■戸別訪問で聞き取りを実施。

## スーダン

### ■紛争による避難民・難民への支援

スーダンと南スーダンとの国境北側に位置する南コルドファン州では、政府軍と反政府軍による昨年来の紛争が10月に入って再び激化。州都カドグリへの砲撃も頻発し、多数の一般市民が犠牲となっている。国内避難民、難民は更に増加し、紛争被災民は合計で数十万人を数える。

JVCが支援するカドグリ近郊の村は今のところ砲撃を免れており、5～6月に種子を配布した穀物や野菜の収穫作業がピークを迎えている。紛争の影響で昨年の耕作期を逸した住民にとっては2年ぶりの収穫であり、自家消費用に保存するほか、余剰分は市場で販売して現金収入を得ている。10月には、家畜を失った住民150世帯に対してヤギ2頭ずつの支援を行なった。(今井・佐伯)



■配布された雌ヤギ。ミルクは貴重な栄養源になる。

## パレスチナ



### ■子どもたちの栄養改善支援（ガザ地区）

4月からガザ市内で実施中の子どもの栄養改善支援事業では、引き続き40人のトレーニングを受けた母親ボランティアが、家庭訪問を通じた栄養失調予防指導に取り組んでいる。10月末には母親ボランティアをまとめている現地パートナーNGO、AEI（人間の大地）から中間報告を受け取り、母乳育児指導や育児カウンセリング、地域組織や幼稚園スタッフへの子どもの栄養改善に関する指導などが順調に行なわれていることを確認した。一方、今年度の後半を迎え、前半での活動をより丁寧にフォローアップすることにより、今まで指導してきたことをより深く対象者に理解してもらい、その知識を行動へ反映させるように促す動きも出てきている。

### ■学校保健・健康教育・巡回診療支援（東エルサレム）

分離壁の両側で、16の学校と15の幼稚園を対象に健康診断と、47の学校と15の幼稚園を対象に食生活・個人衛生などに関する健康教育を実施中。また、教員・地域住民を対象にしたメディカル・デーや、分離壁で隔離された村での巡回診療も定期開催中。メディカル・デーの様子は、パレスチナのネット新聞に掲載された（記事の和訳をJVCウェブサイトの現地ブログ「パレスチナ最新情報」に掲載中）。10月中盤には長谷部事務局長が現地を訪れ、イスラエル入植地に囲まれて立ち退きを迫られている村での巡回診療や学校での健康教育を視察。現地パートナーNGOのパレスチナ医療救援協会も表敬訪問し、これまでの協力に感謝の意を表明し、関係強化を約束した。（今野・金子）

■地域の女性たちに「くる病」予防に関する講習を行なう母親ボランティア。

## アフガニスタン



### ■女性と子供の健康改善のための地域保健医療事業

母親教室を修了した女性たちのその後の成果を確認し、学んだ保健衛生の知識を実践に移すことを推奨する目的で家庭訪問が始まった。クズ・カシュコート村とゴレーク村ではそれぞれ定期的に保健委員会が開かれており、これまでJVCで受けた研修を元に、保健委員会の主導で村人たち自身が井戸の管理をしていく体制を整えている。

### ■教育支援活動

ゴレーク地域の学校の教員を対象に、健康教育の研修を6日間にわたって実施した。15校から28名が参加し、下痢、マラリア、結核や薬の副作用など、地域で頻発している保健問題を扱った。10月から3校の男子学校と3校の女子学校で、健康をテーマに作文を書いて掲示する「壁新聞」の取り組みが始まった。また、モデル校で試験的に始めた「授業研究」（教員どうしの教授法の学び合い）を他の学校でも実施した。

### ■政策提言

日本政府は国ごとに支援の内容を定めた「国別援助方針」を作成しており、今年度の作成予定国にはアフガニスタンも含まれている。JVCは、7月に日本・アフガニスタン両政府主催で開催されたアフガニスタン復興開発に関する東京合合に参加した他の団体と共同で、援助方針策定に対する要望書を公開した。国際社会のアフガニスタン復興への関心が低下する中、JVCは現地で活動する組織として、人々の声を大切にしながら同国の復興の在り方や対話による平和実現に向けて提言活動を継続していく。（加藤）

■授業研究が行なった教室の子どもたち、教員と事業担当者。

## 調査研究・政策提言

### ■IMF・世銀年次総会（東京）

IMFと世銀は、毎年一度、主たる業務・政策・方針について話し合う年次総会を開催しており、3年に一度は加盟国で行なわれる。今年は、10月12日から14日まで東京で開催された。世銀は、ウォフェンソン総裁の頃から市民社会との対話を重視しており、今年も総会に先立つ8日からCSO（市民社会組織）フォーラムが開催され、NGO主催のイベントも開催された。その一つとして、10月9日にJACESや若手の人権研究者と共同でODAの情報公開に関するセミナーを開催した。世銀の情報公開政策と比較しながら、日本のODAの国別援助戦略の公開について議論した。

今回のIMF・世銀年次総会に向けて、国内のNGOはCSO間での情報共有や連携、提言活動を支援するために共同でCSO連絡会を2011年から設立しており、代表の谷山が連絡会の幹事としてこれに参加、運営の一部を担った。（高橋）

## コリア



### ■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

#### ◎延吉ワークショップ

◎延吉ワークショップ

10月上旬に中国吉林省の延吉市にて共同制作ワークショップを実施。延吉市少年児童図書館の協力により、中国在住の子どもたち30名が参加。昨年の巡回展示や他地域の子どもの様子を伝える場も持った（本誌9ページも参照）。◎国内巡回展

■「皆に楽しい話をして友人を増やす」キャラクターを描く延吉の子ども。

日朝文化芸術交流協会の主催による名古屋展が10月後半に開催。27日の講演会では、10年以上にわたる『ともだち展』の取り組みを紹介したほか、平壤でのインタビュー映像も上映した。今後、福岡や大阪でも開催予定。（寺西）

## 福島 三春町から

三春で二度目の収穫祭、  
太陽光発電の完成を記  
念し車座座談会を開催

農業ジャーナリスト

大野 和興

あの三・一一原発震災から二  
度目の秋が福島県三春町にも  
やってきた。JVCも参加す  
る三春・滝桜花見祭実行委員  
会と福島「農と食」再生ネッ  
ト、それに地元三春町の農業  
女性グループ「芹ヶ沢農産加  
工グループ」が季節に合わせて  
行なってきた収穫祭も二度  
目。十月二十一日、首都  
圏から約三十人が参加し、畑  
での野菜収穫、太陽光発電施  
設・町の食品放射能測定所の  
見学、被災地域の再生を話し  
合う座談会などを行なった。

### ■暮らしの足元からの

脱原発

今回の収穫祭も、地元三春  
町と三春を管内に持つJAた

## 国内ひろば

JVC network



■赤カブの収穫。



■町の食品測定センターを見学。



■町、農協も参加しての車座座談会。

むらの協賛を得て行なわれ

た。バスで到着した一行は、  
地元集落の集会所で芹ヶ沢農  
産加工グループのメンバーに  
出迎えられ、代表の会沢テル  
さんの「よくいらっしやいま  
した」の挨拶の後、心づくし  
のお昼。その後、この日のた  
めに種を植え、用意してくれ  
た畑で野菜収穫作業を行なっ  
た。赤い小カブ、ダイコン、  
ブロッコリー、サツマイモ、  
ネギ、カボチャなどなど。  
収穫した野菜はそれぞれ段  
ボールに詰めて宅配便で持ち  
帰るのだが、その前に測定を  
しておこうと、会沢さんが少

量をとって町の測定所「ベク  
レル調べるセンター」に持ち  
込んだ。結果は翌日にわかる  
そうだ。

野菜収穫の後は、芹ヶ沢農  
産加工グループの農産加工所  
のエネルギーを供給している  
太陽光発電パネルの見学。主  
催団体の一つ「福島「農と食」  
再生ネット」がカンパを呼び  
掛け加工グループと共同でつ  
くったもの。発電量は毎時五  
キロワットで、冷凍・冷蔵庫、  
照明、モチツキ器など小さい  
加工所のエネルギーすべてを  
まかない、余った電気は東北  
電力に売電する。「暮らしの足  
元から脱原発を発信したい」  
という芹ヶ沢グループの女た  
ちの願いを形にしたものだ。

◎

### ■地域のこれからを 話し合った車座座談会

その日は町営宿泊施設「三  
春の里」に宿泊。翌朝にベク  
レルセンターを訪ねた。計測  
の結果はネギで一キロ当たり  
六ベクレル（国の基準は百ベク  
レル）。三春町は一台四百万円  
ほどもかけて九台の食品測定  
器を備え、町民の自給用の食  
べ物や直売所で販売する小規  
模生産のものを測定。市場出  
荷する大型のものはJA農協  
がすべて測定している。二十  
ベクレルを超えたものは町の  
直売所では販売しないという  
独自の厳しい基準を設けてい  
る。学校給食については専用  
の測定機器を備え、食材はす  
べて県外のものに限っている。

その後、太陽光発電完成を  
記念して「エネルギー自給  
と農・食・地域の自立」を  
題した車座座談会を「三春の  
里」の大広間で。地元の人た  
ちに大勢参加していただき、  
約七〇人が車座になって話し  
合った。町の住民課長さん、  
JAの営農経済部長さんから  
原発事故と地域のこれからに  
ついての対策をお話しいただ  
き、続いて女川原発の近くで  
被災された宮城県石巻市の住  
民の方、セシウムに汚染され  
た宮城のワラを牛に与えて出  
荷停止になった山形の肉牛農  
家、そして地元三春の女性の  
三人から報告を受けた。地元  
の方からは、日ごろ聞けない  
話し合いに参加できてよかつ  
たという声が聞かれた。

※注① これまでの花見まつりと収穫祭については、本誌288号、293号、295号を参照。

## 募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。  
JVC への募金は税制優遇措置を受けることができます。

### ① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495  
加入者名：JVC 東京事務所

9月計 96,049 円  
10月計 471,375 円

	9月	10月
無指定	27,000 円	88,000 円
タイ	0 円	5,000 円
カンボジア	2,500 円	26,000 円
ラオス	2,000 円	30,000 円
南アフリカ	0 円	29,000 円
パレスチナ	11,480 円	116,530 円
アフガニスタン	24,000 円	48,850 円
コリア	0 円	0 円
イラク	2,000 円	20,000 円
スーダン	5,000 円	26,000 円
東日本大震災	22,069 円	81,995 円

※上表には「夏/冬の募金」は算入していません。

### ② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497  
加入者名：犬養道子「みどり一本」

9月計 126,700 円 / 12 件  
10月計 62,500 円 / 7 件

### ③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としできる手軽な募金方法です。

9月計 2,269,750 円 / 1,922 件  
10月計 2,262,950 円 / 1,926 件

## 編集後記

ロンドン五輪でなでしこ快挙の銀メダル、男子も予想外の快進撃で4位に。続くU-20女子ワールドカップでも、輝かしい未来が垣間見えた。「行ける。」そして秋、勇躍して臨んだ日本代表の対ブラジル戦で、『王国』の底知れぬ奥深さを改めて見せつけられた。代表戦で目の前が暗くなったのは久々だ。06年の惨敗から「別な道」を探ってきて、このメンバーでやって、これが…と。(H)

## イベント報告：JVC パレスチナ事業 20 周年シンポジウム

### 国際協力のもうひとつのあり方を考える

～抵抗する人々に寄り添って～

パレスチナ事業担当 津高 政志



■これまでの20年でJVCを通してパレスチナに関わってきた人たちが登壇した。

現役の事業担当の私としても、目を見開かれる思いだった。

これまでも自分が歴史あるパレスチナ事業を担っているという実感はあったが、事業開始から現在までの20年という時間の中で、これまでの担当者の当時の思いを本人の口からこれだけ聞ける機会はこれまでに正直なかった。

本誌(T&E)でパレスチナという言葉が最初に登場したのは1991年。当時湾岸戦争の緊急支援でイラクに入っていた船川秀夫氏が、「中東地域の根源的な部分」に迫るため、初めてパレスチナに入った。シンポジウムではこの黎明期の話を書川氏本人と、JVC前代表理事の熊岡路矢氏が対談形式で語った。彼らの時代は、パレスチナにJVCがすでに「深入り」している状態から関わり始めた私からすると、広く地域の中でパレスチナを捉えていたことがわかった。

続く佐藤真紀氏は90年代、教育文化支援に携わった人物だ。オスロ合意が締結されるも、続く占領という状況の下で、子どもたちがどのように平和や非暴力というものを理解していた、あるいは理解しようとしていたという部分がためになった。

そして2000年代、繰り返される緊急事態に対し医療や栄養といった分野の支援を行ってきた藤屋リカ(現JVC海外事業担当)が登壇した。人の命を救う、という人道支援の本質的な活動が多かった時代だが、それを続けることだけでは解決できない構造がある中、多くの悩みを抱えながら担当していたことがよくわかった。現在のパレスチナは、封鎖や占領といった状況が既成事実化し、漸次的に悪化していくため、被害や厳しさの程度が外からだとよくわかりにくい状態にある。

コメントに入っていた白杵陽日本女子大学教授からは、変化する状況の中JVCが一貫してパレスチナの人たちに関わってきたことに評価をいただいた。

すべてが駆け足になってしまったことについて反省もあるが、こういった節目にイベントを開催し、事業を振り返り今後活かしていくことは重要であることを痛感した。

JVC ウェブサイト 会員専用パスワード (2013年1月～2月) :

rsE7kH3pdG

JVC ウェブサイトからT&Eのバックナンバーをダウンロードするときに必要です。

# A Happy New Year



絵:ネチオジムラロくん(南アフリカ)

# A Happy New Year



絵:クリスちゃん(南スーダン)

あけまして  
おめでとうございます



絵:シウリアンちゃん(カンボジア)

年賀状の準備はお済みですか？

## JVCスマイル年賀状

JVC 活動地の子どもたちに描いてもらったイラストでつくった「JVC スマイル年賀状」、今年も発売中です。来年の干支にちなんで、さまざまな蛇のイラストが入った年賀状です。絵柄は全 18 種類、いかがですか？

10 枚組  
500 円

※切手は別途  
ご用意ください。



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980 年 2 月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVC の活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志で JVC に参加し、活動を継続してきました。JVC はボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

### ■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVC の方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年 6 回の会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000 円
- ◎学生会員 5,000 円
- ◎団体会員 30,000 円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。入会のお申し込み、会員の方の住所変更などは会員担当の寺西へ。 → s-tera@ngo-jvc.net

### ■オリエンテーション (説明会) にお越しください。

JVC の活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。会場は JVC 東京事務所、参加費は無料、予約不要です。

- ◎第 1 月曜日午後 7:00 - 8:30
- ◎第 2・第 4 土曜日午後 2:00 - 3:30

### ■ E-mail

info@ngo-jvc.net

### ■ウェブサイト

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙 90%、間伐材パルプ 10%) で作成しました。



会員数 (12 月 5 日現在) 合計 1,187 名  
(正会員 582 名、賛助会員 605 名)